

交響曲 第1番

ハ短調 op.68

ブラームス

色彩豊かな関西フィルの音色が、かつてないロマンを生む!

交響曲の常識を打ち破る

ベートーヴェン

古楽器奏法を超えて、濃厚な響きが紡ぐ美しき「田園」

交響曲 第6番

ハ長調 「田園」 op.68

藤岡幸夫

[指揮]

&

関西フィル

ザ・ベスト・シンフォニー!

2010 8.28 (土) 2:00pm ザ・シンフォニーホール

3/28(日) 発売

A 5,000円 B 4,000円 C 3,000円 (消費税込) 主催 朝日放送

[指揮] 藤岡幸夫 [管弦楽] 関西フィルハーモニー管弦楽団

◆ご予約・お問い合わせ

ABCチケットセンター
(ザ・シンフォニーホール内)

06-6453-6000

〒531-8501 大阪市北区大淀南2丁目

◆前売場所

- ABCチケットセンター (ザ・シンフォニーホール内) 06-6453-6000
- 電子チケットぴあ 0570-02-9999 [Pコード: 349-006]
- ローソンチケット 0570-000-407 [Lコード: 55562]
- CNプレイガイド 0570-08-9990
- アスクPG 06-6222-1145
- e+ (イープラス) <http://eplus.jp/> (パソコン・携帯)

ABCの携帯サイトからもチケットが購入できます

メニュー
テレビ (関西)
ABC朝日放送
イベント

QRコードから簡単アクセス!

環境に配慮した環境対応紙を使用しています

※未成年児童のご入場はお断りいたします。 ※出演者、曲目、曲順はやむを得ない事情により一部変更になる場合がございます。予めご了承ください。

ザ・シンフォニーホールのホームページは <http://asahi.co.jp/symphony/> コンサート情報をはじめ、座席表やアクセスマップもご覧いただけます。

藤岡幸夫新企画ついに始動！交響曲のダイナミズムとハーモニーでホールが揺れる！？

藤岡幸夫 ザ・ベスト・シンフォニー！「田園」&ブラームス第1番

“サマー・ポップス・コンサート”“クリスマス・ファンタジア”でお馴染みの大人気指揮者藤岡幸夫さんと関西フィルの新企画がついに始まります！題して、「ザ・ベスト・シンフォニー！」。いろんなCMや映画で耳にすることが多いクラシックですが、その本流“交響曲（シンフォニー）”を聴かずしてクラシックは語れません。そうです！藤岡さんがこの“交響曲”の扉を開くべく、超有名交響曲に挑みます！

ところで、皆さんは交響曲を“ややこしい”と思っていないですか！？たしかに第1楽章から最終楽章まで、長くて複雑に聴こえる交響曲ですが、そこには、たった5分程度で終わってしまうポップスでは味わえない達成感、心の奥まで深く染み込む感動がいっぱい！そして、誰もが知っているあの曲の別の表情や、今まで気付かなかったメロディーなど、傑作たちの新しい魅力にも出会えるはず。何度も何度も聴くごとに味わい深くなっていく、それが交響曲の素晴らしさなんです！！

さあ、先導役の藤岡さんの熱きメッセージと共に、限りなく広がるシンフォニーの世界に旅立ちませんか！

藤岡さんが語る 交響曲への熱き思い

「関西フィルと一緒に活動するようになって11年目。これまで毎年40回を超えるコンサートで共演し、我々ならではの一体感ある演奏を目指してきました。そして今回、関西フィル&藤岡のサウンドで“交響曲（シンフォニー）”の名作をお届けする直球勝負の企画を開催でき嬉しく思います！」

藤岡さんにとって、前半のベートーヴェン「田園」とは？

ベートーヴェンは、よく「楽譜の裏にある精神性」のことについて言われますが、それは彼自身の言葉を借りれば「感情を音楽で表現した」作曲家だからです。たとえば「田園」についても彼は「田園風景を描写したのではなく自然を通して感情を表現した」と語っています。

作曲当時の彼は、大失恋から立ち直り、新しい素晴らしい女性と出会いなんとその女性の屋敷のある敷地に引越してこの交響曲を完成させています。きっと当時の彼には自然がより色鮮やかに感じられ、喜びに溢れていたんでしょう。

でも、もちろん「感情」は、彼の音楽の傑作たる要素の一つに過ぎません。

「田園」のオーケストレーションは、それまでの作品より立体的に描かれており、鳥肌が立つほどすばらしいんです！

“アンチ古楽器奏法”で魅せるロマンティックなベートーヴェン！

現在では、ベートーヴェンをいわゆる古楽器のスタイルで演奏することが多くなりました。このスタイルの演奏を聴くのは好きですが、僕自身はこだわっていません。何故ならベートーヴェンは常に新しい楽器を求めていたし、彼の音楽は当時の楽器の響きをはるかに超越していたからです。彼の弦楽四重奏曲やピアノ・ソナタを聴いてもベートーヴェンの音楽の本質が何なのか、はっきりわかるとしています。それに何より彼はほとんど耳が聞こえなかったのですから…。

もちろん、ハイドンなど、その当時の響きを再現する意味のある作品では古楽器のスタイルを用いますが、今回は、これまで関西フィルと「アンチ・古楽器奏法！」くらいの気持ちで取り組んで来たベートーヴェンを、さらに磨き上げてお届けしたいと思っています。

古楽器奏法って…？

作曲家が生きた時代の楽器や奏法を再現し、その当時の響きを求める奏法。ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンの作品で多く用いられ、ピブラートをかけず直線的な音で軽快な響きで演奏されることが多い。



一方、後半の“ベートーヴェンの第10”ブラームスの交響曲第1番とは？

ベートーヴェンとは逆に、ブラームスの管弦楽作品の多くは（語弊があるかもしれませんが）感情とは切り離された純粋な音楽が多いといえます。交響曲第1番は、ブラームスが長い年月をかけて書き上げた傑作です。第4楽章の主旋律が、ベートーヴェンの第九「歓喜の歌」を彷彿させることから、「ベートーヴェンの10番」とニックネームをつけた人がいるくらい、とても親しみやすい交響曲。

とはいえ、この交響曲にもブラームスのいろいろな思いが込められています。たとえば第1楽章では「元気をだせ！我が弱き心よ！」というコラールの旋律が出て来たり、第3楽章では、ブラームスがよく用いた「死の動機」と「運命の動機」の呼応がみられます。また第4楽章の、アルプスの山が目に浮かぶような雄大なホルンのソロの旋律は、スイスに住むクララ・シューマンの誕生日にプレゼントとして贈られた旋律なのです。（ブラームスは生涯、シューマンの奥さんクララにほのかな恋心を抱いていました！）ブラームスが秘めた思いに触れてみてください！

どちらの交響曲も関西フィルとこの10年何度も取り上げてきました。今回のコンサートでは11年目のシーズンを迎えるもう一度新鮮な気持ちで楽譜に向き合い、さらに掘り下げて作曲家の思いが伝わる演奏にしたいと思っています。それでは皆さん、必ずやコンサートでお会いしましょう！！

藤岡幸夫
2015年11月
Sachio



藤岡幸夫 [指揮] Sachio Fujioka

1962年東京生まれ。幼少よりピアノ、チェロを学ぶ。指揮法を故渡邊暁雄、小林研一郎、松尾葉子に師事。サー・ゲオルグ・ショルティのアシスタントを務める。慶応義塾大学文学部卒業。英国王立ノーザン音楽大学指揮科卒業。日本フィル指揮研究員を経て1990年に渡英。1992年マンチェスターにて最も才能ある若手指揮者に贈られる「サー・チャールズ・グローヴス記念奨学賞」を特例で受賞。1994年のロンドンの夏恒例名物「プロムス」にデビューし大成功を収める。以後、海外のオーケストラへ数多く客演。近年では2006年スペイン国立オヴィエド歌劇場にて「ねじの回転」でスペイン・オペラ

にデビュー、ベスト・パフォーマンス賞を受賞。「ナクソス島のアリアドネ」で再客演。更に2014年には「蝶々夫人」での再客演が決定している。

BBCフィルハーモニック副指揮者、マンチェスター室内管弦楽団首席指揮者を経て、1995年より2003年まで日本フィルハーモニー交響楽団指揮者に就任。2000年より関西フィルハーモニー管弦楽団正指揮者を務め、その後2007年4月より同管弦楽団の首席指揮者に就任。英CHANDOSと契約、これまでにBBCフィルとCDを7枚リリース。2002年度渡邊暁雄音楽基金音楽賞受賞。

公式ファンサイト <http://www.fujioka-sachio-fan.com/>

関西フィルハーモニー管弦楽団 Kansai Philharmonic Orchestra

1970年ヴィエール室内合奏団として発足、1982年に関西フィルハーモニー管弦楽団と改称。定期演奏会やファミリー・コンサートなど、ザ・シンフォニーホールに最多出演を誇るオーケストラ。ミハイル・プレトニョフ、ザビーネ・マイヤー、オーギュスタン・デュメイ、ジャン・フルネなど、世界的演奏家とも共演している。

オフィシャル・ホームページ <http://www.kansaiphil.jp/>